

## 深い悩み・涙の祈り

【聖書】サムエル記上 1章 1～20節

1:1 エフライムの山地ラマタイム・ツォフィムに一人の男がいた。名をエルカナといい、その家系をさかのぼると、エロハム、エリフ、トフ、エフライム人のツフに至る。1:2 エルカナには二人の妻があった。一人はハンナ、もう一人はペニナで、ペニナには子供があったが、ハンナには子供がなかった。1:3 エルカナは毎年自分の町からシロに上り、万軍の主を礼拝し、いけにえをささげていた。シロには、エリの二人の息子ホフニとピネハスがあり、祭司として主に仕えていた。1:4 いけにえをささげる日には、エルカナは妻ペニナとその息子たち、娘たちにそれぞれの分け前を与え、1:5 ハンナには一人分を与えた。彼はハンナを愛していたが、主はハンナの胎を閉ざしておられた。1:6 彼女を敵と見るペニナは、主が子供をお授けにならないことでハンナを思い悩ませ、苦しめた。1:7 毎年このようにして、ハンナが主の家に入るたびに、彼女はペニナのことでも苦しんだ。今度もハンナは泣いて、何も食べようとしなかった。1:8 夫エルカナはハンナに言った。「ハンナよ、なぜ泣くのか。なぜ食べないのか。なぜふさぎ込んでいるのか。このわたしは、あなたにとって十人の息子にもまさるではないか。」1:9 さて、シロでのいけにえの食事が終わり、ハンナは立ち上がった。祭司エリは主の神殿の柱に近い席に着いていた。1:10 ハンナは悩み嘆いて主に祈り、激しく泣いた。1:11 そして、誓いを立てて言った。「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますなら、その子の一生を主にささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません。」1:12 ハンナが主の御前であまりにも長く祈っているので、エリは彼女の口もとを注意して見た。1:13 ハンナは心のうちで祈っていて、唇は動いていたが声は聞こえなかった。エリは彼女が酒に酔っているのだと思い、1:14 彼女に言った。「いつまで酔っているのか。酔いをさましてきなさい。」1:15 ハンナは答えた。「いいえ、祭司様、違います。わたしは深い悩みを持った女です。ぶどう酒も強い酒も飲んでおりません。ただ、主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました。1:16 はしためを墮落した女だと誤解なさないでください。今まで祈っていたのは、訴えたいこと、苦しいことが多くあるからです。」そこでエリは、1:17 「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるようになります」と答えた。1:18 ハンナは、「はしためが御厚意を得ますように」と言ってそこを離れた。それから食事をしたが、彼女の表情はもはや前のようではなかった。1:19 一家は朝早く起きて主の御前で礼拝し、ラマにある自分たちの家に帰って行った。エルカナは妻ハンナを知った。主は彼女を御心に留められ、1:20 ハンナは身ごもり、月が満ちて男の子を産んだ。主に願って得た子供なので、その名をサムエル(その名は神)と名付けた。

### 【序】若さをもらった札幌訪問

私たち夫婦は去る5月24日から札幌教会に参り、父母、叔父母の遺骨を教会墓地から引取り、29日夕方無事に帰って参りました。お祈りを有難うございました。私をご存知のように1ヶ月前に80才になりました。喜美子に支えられた日常生活、剣道の稽古も週3～4回できる体力がまだあります。川越教会が30人を越える群れになるよう後5年はお仕えさせて頂きたいと願っています。それでもさて何時まで続けられるかなど、前途を案じる思いがふと襲ってくるようになりました。

この変化に自分でも驚きました。ですから念願の教会墓地が出来て、父母、叔父母の遺骨を、兄弟、孫たちが居住している関東圏に移しておいた方が良いと兄弟で相談して札幌に引取りに向うに当り、これがお訪ねする最後になるかも知れないと思いました。そこで札幌の皆さんも土曜日に送別の夕食会を準備してくださっていました。

ところが私たちに会った方々は、「何だ、まだ若いじゃないですか」と口々におっしゃるのです。昨日も70代の方から「高齢を感じさせない滄刺とした若さ、研ぎ澄まされた印象を受け、自分も見習って鍛え直す所存です」とメールを頂きました。

一方私は私で、墓地委員長が90才でかくしゃくとしておられました。山から車を運転してご夫婦で霊園に降りて来て、遺骨の引越しを指揮してくださいました。冬の雪道は大変なはずですが。もうお一人の90才も夕食会でバプテスマを受ける意向を表明して下さいました。85才以上の方が幾人も集会に出席しています。80で老いたなどと言ってられません。私は若さをもらって帰って参りました。有難いことでした。

若い時に目白ヶ丘教会と一緒に育ち、気心の知れた山下先生夫妻が身近に支えて下さいますから、心強い限りです。シンガポール、タイ、韓国、中国、ルワンダ、米国、フィリピンその他と、お訪ねしなければならないところが沢山あります。力の限り世界伝道のお役に立ちながら、川越教会にお仕えて参ります。どうぞ宜しく願い申し上げます。

## [1] バプテスト教会の特色

さてバプテスト教会の特色の一つは、全年齢層の教会学校でしょう。赤ちゃんから老人に至るまで全ての方が、教会に集まり礼拝を守るだけでなく、それぞれの年令に分かれて聖書を読み、学び合います。礼拝と教会学校(CS)を車の両輪として、信仰を成長させていきます。私たち夫婦が目白ヶ丘教会から巣立って、札幌教会牧師として赴任したのは1964年クリスマス後でした。その時札幌教会の礼拝は40人余の出席者で、20数名が中高生、10数名が青年、大人は10人弱で、米国の神学校へ留学された前任牧師のご両親以外では32才の私が最年長。24才の高校教師の兄弟が代表執事といった若い教会でした。それでも教会学校強化運動のパイロットチャーチとして、全年齢層の教会学校形成に取り組もうとしていました。そこで私の経験と若いバイタリティとを結合させて、幼稚科3組、小学科9組、幼稚園父母2組の14組を礼拝前に、中学高校科6組、青年成人科6組の12組を礼拝後に、そして乳幼児科を礼拝中にと、合計27組の教会学校を一挙に組織して、しやにむに活動を開始しました。そして礼拝出席が70名台になり、教会が一段階成長を遂げたのでした。

さらに開拓伝道を開始して、中心メンバーを10余名株分けし、一時礼拝出席が減りましたが、小学生も皆大人の礼拝に出席して、教会家族全員の礼拝にしましたら、子どもたちが次々と礼拝で信仰の決心をしてバプテスマを受けるようになり、150名の教会に成長したのでした。今回も礼拝に

出てみましたら、親子孫三世代の出席者が幾組も見られました。

我が家の孫のあんりは、今月2才になります。浦和に引越してから、月二回の浦和教会の幼児クラスに入りました。するとすぐに聖句をちゃんと暗誦するようになりました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべて感謝しなさい」。我が家にきますと挨拶代わりに唱えてくれます。世の闇を照らす神の言葉を心に刻んで成長してくれるとは、何と嬉しいことでしょうか。

川越教会も乳幼児が一人二人と増えてきました。小学生も二人います。彼らが聖書を学ぶクラスが必要です。奉仕者が与えられるよう祈って参りましょう。また礼拝前の成人科の分級にも努めて出席して、聖書を一緒にお読み下さい。祈禱会も礼拝も同じ聖書の箇所から、豊かな命の言葉を汲み取ろうとしています。聖書は読めば読むほど豊かな命をいただける宝の書です。

## [2] サムエルの誕生

さて前置きが長くなってしまいましたが、今日から士師記を終えてサムエル記上に入ります。エジプトからカナンの地に移住したイスラエルの民が、異なる信仰を持つ先住民や周囲の民族と衝突を繰り返しながら、次第に定着していきます。神さまはイスラエルの民が存亡の危機に直面するたびに、士師と呼ばれるリーダーを立てて、護ってくださいました。その歴史が士師記に記されていました。

しかし歴史の流れは、強力な支配者を柱とする王国の出現を必要とするようになりました。その歴史の転換期に、キシの子サウルを選んでイスラエルの最初の王に立てる大切な働きをしたのが、最後の士師であり、最初の預言者であるサムエルです。歴史はサムエルを軸としてサウル王からダビデ王の王国確立に向います。この重要な橋渡しをした宗教的指導者サムエルは、母ハンナの涙の祈りから生まれた子どもです。

ハンナはエルカナと結婚しました。彼は信仰深い誠実な人でした。しかしなかなか子どもが与えられません。エルカナは社会通念に従って、ペニナを第二の妻として迎えました。彼女は子どもを幾人も産みました。ペニナは夫が自分よりもハンナを愛していることを知っています。しかし自分はこのように子どもを幾人も産んでいることで、ハンナに対する優越感を抱いていたことでしょう。

エルカナは毎年一回、遠いシロの神殿に家族全員を連れて出かけ、家畜を犠牲の供え物として献げて礼拝することを常としていました。礼拝後に捧げ物の一部を払い下げてもらい、調理して家族一同で会食します。二人の妻と元気に成長していく息子・娘たちと一緒に神さまを礼拝し、家族一同で楽しく食事できることは、エルカナにとって至福の時だったことでしょう。

しかしハンナにとっては、この上なく惨めでつらい時でした。子どもは神の祝福のしるし、子を産まない女は神から顧みられていないと思われていた時代です。これ見よがしに振る舞うペニナに、ハンナは深く傷ついていきました。ある年のこと、彼女は遂に我慢できなくなり、神殿に逃げ込んで激

しく泣いて祈り続けました。

「万軍の主よ、はしための苦しみを御覧ください。はしために御心を留め、忘れることなく、男の子をお授けくださいますならば、その子の一生を主におささげし、その子の頭には決してかみそりを当てません」。頭にかみそりを当てないとは、信仰の純粹性を保つ献身のしるしとして、髪の毛を切らない姿のナジル人として神の御用に当る生涯を送らせませすという誓いです。

あまりにも長く祈っているので、祭司エリは酒に酔っていると誤解しました。「祭司様、私は深い悩みを持った女です。主の御前に心からの願いを注ぎ出しておりました」。「安心して帰りなさい。イスラエルの神が、あなたの乞い願うことをかなえてくださるように」。泣くだけ泣いて、心からの願いを注ぎ出し尽くしたハンナは、晴れやかな心を取り戻して、エルカナの許に帰りました。

祭司エリの言葉通りに、神さまは彼女を御心に留めて、彼女の願い通りに、男の子を授けて下さいました。ハンナはサムエル(その名は神)と名付け、乳離れするまで3年間手許で育ててから、シロの神殿に連れて行き、祭司エリのもとにサムエルを託したのでした。サムエルがエリの許でどのように成長していったかは、来週の学びになります。

### [3] 信仰をもって生き抜く

神さまは、ペニナには直ぐに子どもを幾人も授けられたのに、彼女よりも遥かに信仰深いと思われるハンナには、どうして子どもを授けなかったのでしょうか。5節に「主はハンナの胎を閉ざしておられた」と記されています。結婚した女性にとって神からいただく一番の祝福は、子どもと考えられていました。

その神さまが胎を閉ざしておられる。祝福を拒否されるとは、余ほど罪深いのではないかと思われても仕方ありません。またペニナもその点を突いて、ハンナをいじめたことでしょう。ハンナを苦しめた一番の悩みは、自分は神さまから見捨てられた罪深い女なのかという罪意識だったのではないのでしょうか。だから祭司エリから「いつまで酔っているのか」と叱られた時、ハンナは「はしためを墮落した女だと誤解なさらないでください」と強い口調で弁明しています。

しかし詩編には「卑しめられたのはわたしのために良いことでした。わたしはあなたの掟を学ぶようになりました」と歌われています(詩 119:71)。これは口語訳・新改訳では「苦しみにあったことはわたしに良いことです」という訳になっています。どちらも原語に忠実な訳です。

私たちは、人が受けている恵みが自分には欠けていると、屈辱や劣等感や罪意識にさいなまれます。これは本当に辛いことです。しかし詩編の作者は、卑しめられたこと、苦しんだことは良かった。それによって神さまの御心を深く学ぶことが出来たからと歌っています。

そうです。ハンナは家族揃って神さまに礼拝を捧げるその時が、みじめな思いにされる苦しみを、

来る年も来る年も味わい続けていたのです。そして悩み嘆き、激しく泣いて泣いて祈り続けました。そしてもしも男の子を授かったなら、生涯その子を神の御用のためにささげますと誓うまでに至りました。

そうしたら、待望の男の子を授かったのです。彼女はそのかけがえのない子を、誓い通りに、乳離れするや祭司エリに托して、神さまにささげました。こうして神殿で育てられた幼子サムエルが、成長して大預言者となり、神さまの栄光を現わしていったのでした。

「わたしの神は情け深い。哀れな人を守ってくださる主は、弱り果てたわたしを救ってくださる。わたしの魂よ、再び安らうがよい。主はお前に報いてくださる」(詩 116:5～7)。この信仰を、私たちもしっかりと持ちたいものです。

### [結] 謙遜に祈る者となる

2章にはハンナの祈りが記されています。その中に次の言葉に注目いたしましょう。「驕り高ぶるな、高ぶって語るな、思い上がった言葉を口にしてはならない。主は何事も知っておられる神 人の行いが正されずに済むであろうか」(3節)。「子のない女は七人の子を産み、多くの子をもつ女は衰える」(5節)。

ハンナの前で誇り高ぶったペニナは、その後どのような生涯を送ったことでしょうか。子どもたち共々に衰えていったのでしょうか。ハンナはサムエルを全き献身者として神の御用に捧げました。すると神さまは、彼女に息子三人娘二人をお与え下さいました。私たちは、恵みを豊かに頂いて、誇り高ぶってはなりません。益々心を低くして、周りの人と恵みを分かち合い、共々に神さまに感謝していかねばなりません。

こうしてイスラエルの歴史の転換期に大きな働きをした預言者サムエルが、ハンナの深い苦しみと涙の祈りから誕生したのでした。貝の涙が美しい光沢をもつ真珠を生み出すと言われています。涙の祈りを神さまは大切に受けとめてくださるのです。この確かな事実をハンナの証から学び取り、私たちも、どんな時にも心を注いで祈る者になりましょう。

完